

香川の医療最前線

222



■かねまつ・やすひさ 1997年徳島大医学部卒。カリフォルニア大サンフランシスコ校脳血管障害研究センター、徳島大付属病院・脳卒中センターを経て現職（脳卒中センター長）。日本脳神経外科学会専門医、日本脳卒中学会専門医、日本脳神経血管内治療学会専門医、徳島県出身。43歳。

脳卒中は、脳の血管が詰まったり破れたりして起きる脳血管疾患で、血管が詰まるのが脳梗塞、破れるのが脳出血だ。昔前は「治らない病気」と言われていたが、現在は発症直後の迅速な対応が治療の鍵を握るとされている。疑いがあれば専門病院で早期に診察を受けることが大切だ。24時間対応の脳卒中センターを設置する四国こどもとおとなの医療センターの兼松康久脳神経外科医長に脳卒中の症状やセンターでの治療と役割について聞いた。

—どのような場合に脳卒中を疑えばいいのか。

突然、片側の手足に力が入らなくなったり、しびれたりする▽ろれつが回らなくなる▽言葉が出てこなくなる▽片方の目が見えなくなる▽バットで殴られたような頭痛や吐き気を催す—といった症状がみられた

時。特徴は突然起こることだ。また、これらの症状は10分程度で治まることもあり、この場合一過性脳虚血性発作と言われる。これは脳梗塞の前触れであること。これは、脳血管に詰まった血栓を溶かすことにより、脳への血流を再開させる治療。意識障害を伴う患者

—手術はどうか。

以前と大きく様変わりしている。開頭手術を行っていただくも膜下出血患者の治

—意識を回復させたり、半身麻痺患者の麻痺を改善したりすることもある。「脳卒中の治療はスピードが命」と言われる理由の一つがここにある。

—24時間体制で患者を受け入れ早期回復に取り組んでいる

脳卒中 突然の半身脱力に注意

早期発見で投薬治療可能

があり、適切な治療を受けないと、数日から数カ月以内に脳梗塞になる可能性が高い。

—脳卒中の診断は進歩しているのか。

脳梗塞は磁気共鳴画像装置(MRI)の普及と技術革新により、数十分から数時間で診断できるようになった。診断のみならず原因も分かり、それに応じた適切な治療が早期に可能とな

—脳卒中センターでは、24時間体制で患者を受け入れ早期回復に取り組んでいる

療が、今では血管カテーテルを用いた血管内治療の発達により、頭を開けずに行う手術法が半数を占めるようになってきている。また、血管内治療はrt-PAによる血栓溶解療法が効かなかった患者に対して、血管カテーテルから直接血栓を摘出し、血流を再開させることを可能にした。

—脳卒中センターの役割

センターは、24時間体制で一刻を争う脳血管障害の治療に当たり、地域医療に貢献することに特化した施設だ。発症4時間半以内の血栓溶解療法を積極的にを行い、開頭手術はもろろん、最新の血管内治療を含めた幅広い治療に対応できる。脳卒中の専門医師だけでなく、看護師、理学療法士、作業療法士、言語療法士、放射線技師、栄養士ら、脳卒中を専門とするスタッフがそろい、早期診断、治療とリハビリテーションを組織的に行っている。脳卒中患者の少しでも早い回復と社会復帰、また、患者一人一人の長期的なQOL(Quality of Life)生活の質の改善を目指している。

■ 四国こどもとおとなの医療センター脳卒中センター

2013年5月の開院以来、年間220例の脳卒中患者を受け入れ、11件のrt-PA療法と血管内治療を含む45件の手術を行っている。常勤医5人。

所在地：善通寺市仙遊町2-1-1
電話：0877(62)1000
<http://www.shikoku-med.jp/>